コレンテ　vol. 45　n.412　　marzo　2025

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑮

＊　「ふたつの世界」を抱きしめて　＊

緋月　まや

調べ物をしていて、あっと声を上げた。イタリアという国に心惹かれた日本人なら、一度は手に取ることになるだろう須賀敦子の名エッセイ『トリエステの坂道』に登場する「ウンベルト・サバ書店」の店主、マリオ・チェルネさんが 2024 年1月に他界されていたことを報じる地元メディアの記事を目にしたからだ。「サバ書店」は元々、イタリア文学者であり、随筆家である須賀敦子が邦訳を手掛けたトリエステ生まれの詩人ウンベルト・サバが営んでいた古書店で、当時サバがつけた名前は「ふたつの世界の書店」といった。なんとも不思議な名前である。その名に込めたサバの想いを、マリオさんは今に受け継いできた。「ふたつの世界に生きようとするものは、たえず居心地のわるい思いにさいなまれる運命を逃れられない」と、サバの生涯に重ね、須賀敦子は宣告する。「ふたつの世界」に生きると、ふたりの自分を抱えることになる。それは、なかなかやっかいなことであるらしい。片道切符でフィレンツェ行きの飛行機に乗ってから7年になり、私も、異国と母国のふたつのアイデンティティの間で揺れることがある。「ふたつの世界」に生きるとは、一体どういうことなのだろう――？

＊

私が、イタリア北東端フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州の州都トリエステへの旅に出たのは、2019 年早春のことだった。トリエステをこよなく愛

【サバ書店（2019 年）】

したウンベルト・サバは、19 世紀末に生まれ、ふたつの世界大戦を生き抜いた、イタリア屈指の現代詩人である。詩集『カンツォニエーレ』を代表とするその作風は、愛や喪失、孤独をテーマに、人間の内面を探求した心理描写が冴える。トリエステ中央駅からアドリア海に沿って歩いていくと、港に面した広場が見えてきた。まちの顔「イタリア統一広場」である。市庁舎を真ん中に、美しい建物が広場の三方をぐるりと取り囲みながら、夕闇に浮かんでいる。ここは、イタリアではない――。フィレンツェを見慣れた私の目にはそう見えた。ここは、オーストリアだ。一度訪れたことのあるウィーンの街並みが思い出された。実際、トリエステは、西洋史における名門中の名門ハプスブルク家を

君主とするオーストリア帝国の貿易を担う港町として繁栄したまちだ。その証に、トリエステにはウィーンの優雅なカフェ文化が根づいている。19 世紀末、ウィーンでは画家のクリムトや作曲家のマーラーが活躍して「世紀末ウィーン」と呼ばれる文化的爛熟期を迎えた。芸術家や知識人は一日の大半をカフェで過ごし、議論に明け暮れた。その影響を受けたトリエステにも、「カフェ・ストリコ」と呼ばれる歴史的カフェがたくさんある。私は、サバも訪れたというカフェ・サン・マルコに向かった。

広々として、重厚感のある調度品で統一された贅沢な空間は、驚くほどウィーンの老舗カフェにそっくりだった。当然と言えば、当然だ。トリエステが、19 世紀後半のイタリア統一運動を経てイタリアの一員に戻ったのは、第一次世界大戦後のことである。イタリア語を話すイタリア人が、ブーツの形をしたひとつの国にまとまったのはわずか 160 年ほど前のことで、中世以降、イタリアは小国に分裂し、列強の支配を受けてきた。トリエステは 14 世紀、オーストリアの支配下に入る道を選んだ。近隣国との戦いの中、大国の傘下に入り庇護されることでしか生き残ってはいけなかった小国の悲哀である。私はソファーに腰を掛け、プロセッコを一杯注文した。イタリアの顔として、今やシャンパンにも劣らぬ知名度を誇る発泡ワインだが、トリエステに発祥の起源を持つことはあまり知られていない。グラスの向こうに、オーストリアの仮面を外したイタリアが映る。プロセッコとはそもそも、現在もトリエステに実在する村の名前だ。プロセッコ村でつくられるワインの起源は古く、ローマ帝国初代皇帝オクタヴィアヌスの妻に愛飲され、長寿の秘薬と信じられていたという伝説を持つ。トリエステは古代ローマ時代にその植民地となり、イタリア文化を紡いでいったまちである。プロセッコは、オーストリアの支配下に入って何百年経ってもずっとイタリア語を話し、イタリアというアイデンティティを保ち続けたトリエステの象徴だ。「トリエステには多くの悲しみがある」と、サバはうたう。イタリアでありながら、オーストリアのふりを続けるしかなかったトリエステの悲しみ、その複雑なアイデンティティの苦悩に同調したからこそ、サバはこのまちを愛したのだ。

【山の道】

サバにとって、とりわけ大切だったのが「山の道(via del monte)」という坂道だ。イタリア統一広場から海を背に丘の方へ歩いていくと小さなティーショップがあって、「山の道」はそこから始まっていた。見上げれば、店の壁に「山の道」と記された表示板があった。その横の碑には、この道をうたったサバの詩が刻まれていた。「坂の片側には、忘れられたユダヤ人たちの墓地がある。ぼくの想いにとってはとてもたいせつな、その墓地……」と、詩は続く。

サバには、ふたつの血が流れている。サバの父親はイタリア人で、母親はユダヤ人だった。中世以来、ヨーロッパのユダヤ人は文化的、宗教的に異質な存在と見なされ、ゲットーと呼ばれるユダヤ人居住区に隔離されてきた。サバの母親もトリエステのゲットー出身であった。父親はカトリックからユダヤ教に改宗してまでサバの母親と結婚したものの、サバが生まれる前に蒸発した。サバは、母方の影響を大きく受けて育つことになる。

車一台と歩道の幅しかない急こう配を上り、私は、両側に並ぶ低層住宅の向こうに墓地らしきものを探してみたが、見当たらなかった。その代わりに、一軒の家の扉に「1938 年:トリエステにおける民族差別の法律」と題された展示会のポスターが貼ってあるのを見つけた。祖国を喪失して二千

年もの時を流浪の民として漂ってきたユダヤ人の嘆き、その痕跡は今もなお「山の道」に横たわっていた。家の表札には「トリエステのユダヤ共同体博物館」と記されていた。1938 年、ナチス・ドイツは、ヨーロッパ中のユダヤ人を惨劇に巻き込む準備を着々と進めていた。ユダヤ人墓地へと続く「山の道」を歩きながら、サバは自分のアイデンティティについて、母の血について、想いを巡らせたに違いない。サバがトリエステを愛したもうひとつの理由は、それが母の故郷だったからかもしれない。

【サバ書店（2019 年)】

「サバ書店」はまちの中心部、サン・ニコロ通りにあった。アーチ型の入り口のガラスの扉を開けると、小さな店内に、高い天井まで届く壁一面の本棚に本がぎっしりと詰まっていた。その本棚を背にして、店主らしき男性が立っていた。手前のテーブルには、サバに関する書物の上に重ねて、なんと日本語版の『トリエステの坂道』が置いてあった。「もしかして、この本に出てくるマリオさんですか？」と尋ねると、「はい」と、その大柄な男性は小さく微笑んだ。

第二次世界大戦の勃発に伴い、ユダヤ人排斥が本格化する中、サバも逃亡生活を余儀なくされた時期があり、その間は「ふたつの世界の書店」を助手のカルロ・チェルネ氏に預けた。マリオさんの父親である。その後を継ぎ、マリオさんは 82 歳で亡くなるまで、「サバ書店」を守ってきた。「この『トリエステの坂道』を売っていただけますか？」と、私は尋ねた。「日本人のあなたには、この本を手に入れることができる場所は他にもあるでしょう。これは、イタリア人のために置いておいてくれませんか？」と、マリオさんは言った。その言葉は、私にとって、何よりも素敵なトリエステのおみやげとなった。

「ふたつの世界」を生きるサバの痛みは、イタリア人の夫を得て、たった数年で死別した後もその最愛の人を想い続け、日本とイタリアという「ふたつの世界」を生き抜いた須賀敦子の共感を呼び起こしたことだろう。そして、その共感に、私たちもまた共感を覚えずにいられない。それはきっと、「ふたつの世界」を抱えたことのない人間などこの世に存在しないからだ。ひとつの国に生きたとしても、ひとりの人間は常に「ふたつの世界」を内包している。社会人である自分と家庭人である自分、家庭人である自分と個人である自分、子である自分と親である自分、自由に生きたい自分と束縛されていたい自分……。人はみな、痛みを抱えながら「ふたつの世界」を生きていく。トリエステのまちには、そんな人生の旅人の痛みを、静かに抱きしめるかのような優しさがあった。まるで、傷ついた者だけが、誰かに優しくなれるみたいに。

＊

マリオさんが亡くなると、書店のオーナーであるトリエステのユダヤ共同体は寄付を募り、修復に着手した。近代的な書店にするのか、博物館にするのか、当初は改修の方向が見えなかったのであるが、官民一丸となって最終的にはマリオさんが守ってきた、サバ在りし日の書店を再現することになった。寄せ木張りの床、カウンター、サバの愛用机などの調度品は保存された。2万8千冊の蔵書はすべて元通りに配置され、2024 年秋に再オープンを果たした。トリエステのまちと詩人サバの「ふたつの世界」を証言する形で書店が残されたことに、天国のマリオさんも胸を撫でおろしておいでだろうか。 長い間おつかれさまでした。マリオさん、安らかにお眠りください。

（ライター、 イタリアソムリエ協会／
AIS 認定ソムリエ）

イタリアげんぱつ紀行　その７

＊SOGIN について調べる＊

二宮 大輔

すでに何度か名前を出してきたが、今回は SOGIN について改めて調べてみた。SOGIN というのは Società Gestione Impianti Nucleari の略称で、イタリア語で核施設管理会社を意味する。発音はカタカナ表記だと「ソージン」。1999 年に国営電力会社 ENEL が民営化したことに伴い、そのグループ会社として、原子力発電所の解体を目的に設立された。その株の大部分は現在も経済財政省が保有しており、限りなく国営に近い民間企業と言える。SOGIN の主な活動は二つ。先述の原発の解体と、放射性廃棄物の処理だ。私がこれまで外から見学してきた原発の解体作業を進めているのがこの SOGIN で、現在は国内四つの原発と五つの核関連施設の解体を進めている。2004 年から工業や医療、科学の分野で生み出される放射性廃棄物の処理を担うヌクレーコ(Nucleco)をグループ会社にしており、ロシア、アルメニア、ウクライナなどの東欧や、中国や韓国でも原発解体の調査やコンサルタント業を行っている。アジアまで活動範囲を広げているのは意外だったし、緊張状態にあるウクライナとロシアの両国と関わっていることも、放射性廃棄物の問題がいかに重要かを物語っている。

【SOGIN のロゴ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/SOGIN

そんな SOGIN の喫緊の課題はイタリア国内で国立保管所 Deposito Nazionale を選定することだ。これは工業・医療で生み出される低レベル放射性廃棄物の最終処分場かつ「核のゴミ」と呼ばれる高レベル放射性廃棄物の 50 年間の中間貯蔵地を兼ねるもので、84,000 立方メートルの大きさを想定している。うち 6 割が高レベル放射性廃棄物、4 割が低レベル放射性廃棄物の置き場に使われる。ちなみに現在イタリア全土の中間貯蔵地にある放射性廃棄物は 42,000 立方メートルで、すでに Deposito Nazionale の半分はそれで埋まる計算になっている。ではこの施設をどこにつくるべきなのか。これについては、地震や洪水などの災害の危険性がないこと、海岸から 5 キロ以上離れていること、近くに工業地帯や軍事基地、歴史的建造物がないことなど、様々な条件を加味して SOGIN が調査を行い、イタリア環境・エネルギー安全保障省が 2023 年 12 月に 51 の候補地が発表している。上記の調査から、全国にまんべんなく候補地があるのではなく、いくつかの地域に候補地が集中している。具体的にはピエモンテ州アレッサンドリア、ラツィオ州ヴィテルボ、バジリカータ州マテーラ、サルデーニャ島南部などだ。候補地リスト発表後、Deposito Nazionale に立候補する自治体がないか 2024 年 3 月まで猶予期間を設けたが、立候補ゼロで期限切れとなった。ゆえに現在は、51 の候補地から絞ろうとしているのがイタリアの状況だ。

強調したいのだが、Deposito Nazionale を最終処分場として使えるのは低レベル放射性廃棄物のみだ。原発から生み出される高レベル放射性廃棄物にとっては、中間貯蔵地でしかない。原発廃止の国民投票から 38 年、SOGIN の設立から 26 年が経っているが、あまりにも進捗が滞っている印象を受ける。

世界に目を向けてみると、この課題をいちばん積極的に進めている国はフィンランドである。ボスニア湾に面したオルキルオト島に最終処分場がつくられ、2021 年 12 月に操業許可申請が提出され、2024 年には試験操業が開始された。いっぽう日本では、北海道の泊原発から 30 キロの距離にある寿都町と神恵内村が最終処分場として立候補して文献調査がはじまった。

一般的に高レベル放射性廃棄物の最終処分場を決定するには、候補地が決まってから 2 年間の文献調査、4 年間の概要調査、14 年の精密調査を経て、かつ近隣住民の反対が出なければ、よう

やく認可される。フィンランドは認可された段階、日本は文献調査が始まった段階にあるわけだが、イタリアは、そのかなり前段階で足踏みしており、他の原発保有国と比べると、かなり遅れを取っている。SOGIN はエキスパートとしてグローバルに調査やコンサルタントもしていると書いたが、この遅延ぶりはどういうわけか。

SOGIN についてもやもやするのはそれだけではない。今回いろいろ調べものをするために、SOGIN の公式サイトを参考にしたのだが、その沿革を紹介したページは次のような文章から始まる。

> 1999 年、私たちは 1930 年代イタリアの若き物理学者グループ「パニスペルナ通りの青年たち」が始めた挑戦のバトンを受け取りました。エンリコ・フェルミによって指揮された青年たちのさまざまな研究は、1942 年、世界初の原子炉の完成という成果を上げます。

エンリコ・フェルミというのは、かの「原爆の父」ロバート・オッペンハイマーとともに原子爆弾の発明に貢献したイタリア人物理学者だ。彼はもともと「パニスペルナ通りの青年たち」(I ragazzi di via Panisperna)と呼ばれる若き研究チームのリーダーだった。20 世紀の初頭、ローマのテルミニ駅から徒歩 10 分の距離にあるサンタ・マリア・マッジョーレ教会とナツィオナーレ通りを結ぶパニスペルナ通りにローマ大学サピエンツァの研究センターがあり、フェルミは 1934 年にそこで熱中性子を発見し、4 年後の 1938 年にノーベル物理学賞を受賞する。1938 年は折しもイタリアで人種差別法が施行され、ユダヤ人への風当たりが厳しくなった年でもある。ユダヤ人の妻を持つフェルミは、国内にいることに危険を感じ、ノーベル賞授賞式出席を機に国外に逃亡する。こうしてアメリカに移り住みコロンビア大学で教鞭をとりながら、さらに 4 年後の 1942 年に世界初の原子炉を完成させる。その後、オッペンハイマーとともに原爆開発に携わった。

フェルミを始めとするイタリアの若き才能たちが物理学に情熱を注ぎ、当時の最新の原子力研究を結実させ、世界初の原子炉を完成させた。そして今 SOGIN は廃棄物処理という課題に向き合い、「パニスペルナ通りの青年たち」と同様に、新たな道を切り開くべく最先端の研究に情熱を注いでいる。というのが沿革ページの言わんとしているところだ。だが、この「パニスペルナ通りの青年たち」と原発を解体する SOGIN を結びつけるのには違和感を覚える。前回見学したブラジモーネの研究者たちがそれを言うならしっくりくるのだが、原発解体と廃棄物処理を担う SOGIN が、どのようにバトンを受け取ったというのか。「パニスペルナ通りの青年たち」の情熱の物語を、中間貯蔵地の選定も遅々として進まない SOGIN が利用して、ウェブサイト上だけでも体裁を取り繕おうとしているようにも見える。

【エットレ・マヨラナ】
出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Ettore_Majorana

さらにもう一点付け加えておきたい。「パニスペルナ通りの青年たち」に、チームリーダーのフェルミをもってして「ガリレオやニュートン並みの天才」と言わしめたエットレ・マヨラナという物理学者がいた。1906 年カターニアに生まれ、高校入学時に家族でローマに移住。物理を学び、1929 年に満点の成績でローマ大学を卒業する。このときの指導教官が 5 歳年上のエンリコ・フェルミだった。その後マヨラナはパニスペルナ通りで研究の日々を過ごす。体調を壊しながらもニュートリノの先行研究など、多くの示唆的な研究を続けた。ところが、ナポリ大学で教鞭をとり始めた翌年の 1938 年、31 歳の若さで謎の失踪を遂げる。シチリア島のパレルモからナポリに向かう船の中で消息を絶った。なぜパレルモに行ったかわからないし、

そもそも船に乗ったのかも定かではない。そして何よりも失踪した理由がわからない。

マヨラナの失踪は多くの人の興味を集め、その謎を解明しようとジャーナリストや学者がさまざまな説を打ち立てている。なかでも有名なのは作家レオナルド・シャーシャの修道院隠遁説だ。シャーシャは 1975 年に『マヨラナの失踪—消えた若き天才物理学者の謎』と題して、マヨラナ失踪の謎に迫ったノンフィクション作品を発表している。マヨラナの周囲の人間の証言などをもとにしたシャーシャの主張はこうだ。天才的な物理学者だった彼は、科学の研究が将来的に生み出すであろう人類の不幸に絶望し、また科学者として自分もその不幸に加担した罪悪感に苛まれ、これまでとはまったく異なる生活を求めて修道院の門戸を叩いたのではないか。マヨラナの妹マリアも、兄が度々「物理学は間違った道に行こうとしている」と言っていたと証言している。

【レオナルド・シャーシャ】
出典:https://it.wikipedia.org/wiki/Leonardo_Sciascia

シャーシャの説はマヨラナの同僚たちによって否定されているし、他にも驚くような仮説が多数ある。例えば、写真の分析によって少なくとも 1955 年から 1959 年の期間マヨラナはベネズエラに滞在していたことが明らかになったとの報道がある。また、2016 年には哲学者のジョルジョ・アガンベンが、著書『実在とは何か　マヨラナの失踪』で、マヨラナの失踪を科学哲学的見地から解明しようと試みている。結局のところ真相はようとして知れないが、マヨラナの失踪に感じる不穏さは、ある意味で「パニスペルナ通りの青年たち」を発端に始まる原爆投下や原発事故といったその後の時代の悲劇に通じるものがあるのは確かだ。ゆえに、彼らを肯定的な面だけで捉えた SOGIN の態度に、私は改めて首を傾げたというわけだ。

長々と批判してきたが、SOGIN はその活動意義を知ってもらおうと、彼らが管理するイタリア国内四つの原発を一般に公開する OPEN GATE というイベントを毎年 5 月に開催している。そう、昨年私が行きそびれたイベントだ。今年こそは OPEN GATE に参加して、今回述べてきたような疑問と違和感を SOGIN の「中の人」にぶつけてみたいと思う。その様子を、次回書ければと思っている。

（つづく）

（翻訳家、元当館語学受講生）

＜春の無料体験レッスン＞

4 月からの新学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。ご参加お待ちしております。

●イタリア語無料体験（初心者向け）
京都本校:　4 月 2 日（水）13:00
　　4 月 5 日（土）11:00
ウィングス京都: 3 月 31 日（月）19:00
大阪梅田校:　4 月 3 日（木）19:00

●イタリア語無料カウンセリング（経験者向け）
京都本校:　4 月 5 日（土）14:00～

●スペイン語無料体験（初心者向け）
京都本校:　4 月 8 日（火）15:30

編集・発行 / （公財） 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/